二〇一一年二月二三日（参加者一八名）

ゆくりなく師と出会ひたる梅の丘　はく子
梅似合ふ白亜の館は丘の上　〃
犬ふぐり踏むまじ苑の遊歩道　〃
朱鷺の舞てふあけぼのの色の梅　〃
梅林を抜け子どもらは裏山へ　〃
男手も大活躍す大根焚　うつぎ
句会には行くつもりらし春の風邪　〃
珠と散る水車の飛沫水温む　〃
海光のいまとどきたり梅の丘　かれん
瀬の楽は四阿あたり梅日和　〃
ふりむけば眼下に霞む港街　〃
遠山を屏風に野焼き煙たつ　よし子
小流れの木橋渡りて踏青す　〃
梅ばかり見て足元の名無し草　〃
春めくや路上ライブの人の輪に　ひかり
梅林のどの径とるも人ばかり　〃
雛の前娘と昔話など　つくし
金髪の乗馬の乙女風光る　〃
春泥の苑の迷路にまよひけり　わかば
春の雪ほこと積みたる祠かな　〃
とりどりの肥料袋や春田打　こすもす
水音のジャズを奏づる里の春　〃
ひと息に雛の眉かく筆の先　小袖
古雛いと小さくとも気品満つ　〃
肩車風船空に泳がせて　有香
研して早春の山削る音　〃
しだれ梅つまみ細工のごとつぼむ　菜々
うららかや三門飛簷反りにけり　〃
香に酔ひて雅号うべなふ梅見かな　きづな
おしゃべりの花咲く梅の四阿に　〃
この貌のどこにあの声猫の夫　宏虎
レンズ向けられて羞じらふ梅の花　ぽんこ
温かや退院許可の医師の声　百合
春水のはじける綺羅や鯉ジャンプ　せいじ
四阿に句仇集ふ梅日和　満天
春うらら車掌は若き女の子　〃
枝移りする鳥数多風光る　〃
ふり向けば六甲連山春霞　〃

定例句会みのる選

二〇一一年二月二三日（参加者一八名）